

学会ハイライト

アトピー性皮膚炎治療研究会 第22回シンポジウムを終えて

(2017年1月28日(土), 国立京都国際会館)

加藤 則人

京都府立医科大学大学院医学研究科皮膚科学教授

はじめに

アトピー性皮膚炎治療研究会は、アトピー性皮膚炎の治療法を医学的に正しく評価し発展させることを目的として青木敏之先生らによって設立された研究会で、これまで1年に1回アトピー性皮膚炎の治療で課題となるテーマを決めてシンポジウムを開催してきました。この研究会が発足した当時は、アトピー性皮膚炎の病態に不明な点が多く、治療法に関しても医師の中でコンセンサスが得られていない状況でした。そのような中で、本研究

会ではアトピー性皮膚炎の治療に携わるさまざまな立場の方々が集まって時間をかけて討論することによって、参加者のアトピー性皮膚炎の治療に関する知識とスキルを高めてきました。このたび、京都では安野洋一教授(当時)が開催して以来十数年ぶりとなる2017年1月28日(土)に国立京都国際会館で本研究会を開催させていただきました。

今回のテーマ

過去のアトピー性皮膚炎治療研究会では、「心身医学的アプローチ」「漢方治療」「バリア異常」「痒み」「生活習慣とストレス」「ステロイド外用療法」などさまざまな課題がテーマとなっており、昨年は獨協医科大学越谷病院皮膚科の片桐一元先生によって「治せないアトピー性皮膚炎」をテーマに開催されました。今回は昨年に続いて、「考えよう治療に難渋するアトピー性皮膚炎」をテーマにしました。この研究会では、参加者全員が参加する討論が極めて重要であり、今回もエキスパートの先生方の基調講演に続いて討論の時間を十分に設けました。

当日の研究会の様子

京都の冬は底冷えすることで知られており、中でも国際会館のある岩倉地区は京都市の中心部に比べると気温が2～3℃低く、雪が降ることも多い地域ですが、研究会当日は快晴で春を感じさせる陽気でした(図1)。

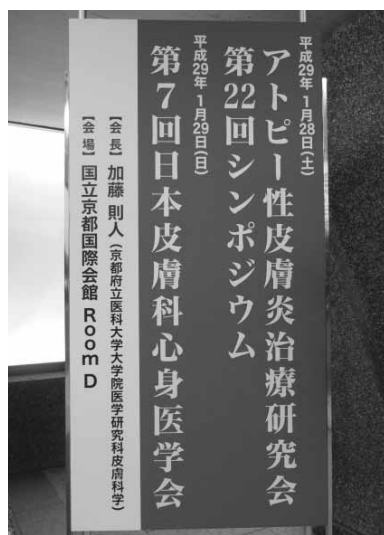


図1 翌日は同じ会場で第7回日本皮膚科心身医学会を開催しました。

開会挨拶(図2)に続く朝一番のスポンサードセミナーは、「アトピー性皮膚炎の患者さんの気持ちに寄り添う」というテーマで、まず京都大学皮膚科の本田哲也先生にアトピー性皮膚炎の病態と現在開発中の治療についてわかりやすく解説いただきました。続いて、NPO法人日本アレルギー友の会の丸山恵理さんにアトピー性皮膚炎の患者の気持ち、アトピー性皮膚炎の診療に携わる医師への思いなどについて語っていただきました。この講演では、患者がわれわれ医師に期待することとして、単に薬剤を処方することだけではなく、皮疹を丁寧に診察すること、そのうえで疾患や治療に関する具体的でわかりやすい説明など患者自身が治療の意義を十分に理解して積極的に治療に関わるために伝えるべきことを十分に伝えること、などがあげられました。医師患者間の良好なコミュニケーションや基本的な診察が、二人三脚でアトピー性皮膚炎の治療に当たるうえでいかに大切かを改めて認識させられた、参加者の心に重く響く大変示唆に富む内容でした。

その後、治療に難渋するアトピー性皮膚炎として、痒疹と手の湿疹を取り上げ、片桐一元先生と札幌医科大学皮膚科の澄川靖之先生に、それぞれ基調講演をしていただきました。片桐先生には、十分量のステロイド外用薬および通常の抗ヒスタミン薬内服により軽快しないことが多いことを痒疹の臨床的定義とし、アトピー性皮膚炎患者にみられる痒疹の特徴や発症機序、紫外線療法、シクロスポリン内服なども含めた片桐式痒疹治療アルゴリズムについてわかりやすく解説していただきました。澄川先生には、ご自身で経験されたアトピー性皮膚炎患者にみられる手の湿疹を中心に、その特徴を含めて治療について考察していただきました。アトピー性皮膚炎患者にみられる手の湿疹が、通常の手湿疹とは異なり手背に認められることが多いこと、全身の皮疹は寛解しているのに手の皮疹のみが改善しないこともある、とのことでした。

ランチョンセミナーでは、大阪大学皮膚科の室田浩之先生に「悪化因子に学ぶアトピー性皮膚炎



図2 開会挨拶のときは空席が目立ち、不安を感じながらスタート。

の病態と治療」というタイトルで講演していただきました。各年代ごとに悪化因子が異なり、それに応じて皮疹の形態や分布、治療への反応性が異なること、薬物療法とともに症例ごとに悪化因子を探索してできる範囲で対策を講じることが大切なことなどをお話していただきました。また、温熱と汗に焦点をあて、ヒトの発汗機能とその意義、生理学的・解剖学的な特徴についてもわかりやすく解説していただきました。

特別講演は、京都府立医科大学統合生理学の八木田和弘教授に「サーカディアン・リズムと炎症～睡眠・自律神経からアトピー・炎症まで～」と題してご講演いただきました。アトピー性皮膚炎の皮疹が寝不足で悪化すること、痒みのために眠れなくなると寝不足のためにさらに皮疹が悪化することなど、生活のリズムの乱れがアトピー性皮膚炎の皮疹の悪化に関係するという事象は日常的に経験します。そのメカニズムの一端を考えるうえで、近年明らかになりつつあるサーカディアン・リズム(概日リズム)と生体のさまざまな機能の関係を勉強してみたいと以前から思っていたので、この機会にこの分野でグローバルに活躍しておられる八木田先生に講演をお願いしました。地球上に生きる生物にとって地球の自転に伴う昼夜環境の周期的変化への適応は生存に必須で、われわれの体内時計には地球の自転周期を正確にはかることで環境変化を予測し生体機能をあらかじめ



図3 ほどなく満員となり座席を追加。参加者，講師，座長を交えて活発な討論が展開されました。

適応させておく働きがあり，ヒトを含む哺乳類の体内時計は，睡眠覚醒，精神機能，自律神経活動（血圧などの循環器機能や消化器機能），内分泌機能，免疫機能など極めて多岐にわたる生理機能の概日リズムを制御しているそうです。概日リズムの障害とアトピー性皮膚炎や炎症性腸疾患などの炎症性疾患の症状増悪との関連も指摘されているとのことで，日々の診療において患者さんにできるだけ規則的な生活のリズムを保つよう指導することの重要性を再認識しました。

続くスポンサードセミナーでは，国際医療福祉大学の菅谷誠先生に日本皮膚科学会アトピー性皮膚炎診療ガイドライン2016年版について概説していただくとともに，その診療ガイドラインの中で13回出てきた「アドヒアランス」のアトピー性皮膚炎の治療における重要性についてお話いただきました。治療アドヒアランスは，疾患の成り立ちや薬物療法，悪化因子対策などの意義を患者自身が十分に理解し，それらを積極的に継続的に実践する姿勢を意味します。慢性疾患，中でも面倒な外用療法を患者自身が長期にわたって継続する必要があるアトピー性皮膚炎の治療効果を高めるためには，患者の治療アドヒアランスを向上させる

ことが極めて重要です。菅谷先生らのインターネット調査では，アトピー性皮膚炎患者が外用薬を塗らなかった理由として，乾癬や足白癬など他の慢性皮膚疾患と比べて「薬がなくなったから」という理由が多く，「効果がなかったから」という理由は少なかったとのことです。医師は，薬が患者の手元に残っている間に受診するよう促すなど，治療アドヒアランスに配慮することが重要なことを再認識しました。

午後の指定演題は，まず乳児期の難治性アトピー性皮膚炎についてとくに顔面や頭部の皮疹を中心に，神奈川県立こども医療センター皮膚科の馬場直子先生にご講演いただきました。乳児期の顔面・頭部の湿疹病変のコントロールが悪い医師側の要因として，副作用を懸念するあまりステロイド外用薬の処方躊躇する，あるいはランクを低く抑えすぎる傾向があることや，軟膏の塗り方などの具体的な指導がなされていないこと，などがあげられました。また，保護者側の要因として，外用療法を自己判断で加減したり中断するケースが多いことなどもあげられました。小児アトピー性皮膚炎の治療においては，日々の治療を実践する保護者の意識を変えてモチベーションを高める

ことが何より大切であり、湿疹の存在によって悪化因子が増える悪循環が生じることやアレルギーマーチについて十分に説明し、皮疹が軽快してもなおプロアクティブ療法やスキンケアを継続することが重要であることを、数多くの症例を提示しながらわかりやすくお話してくださいました。

続いて、成人アトピー性皮膚炎の頭部や顔面の難治性皮疹への対応について、慶應義塾大学皮膚科の海老原全先生と島根大学皮膚科の金子栄先生にご講演いただきました。海老原先生には、痒疹型や眼瞼に湿润傾向の強い皮疹が残る例、頭皮に癬痕を残すような難治性皮疹の治療について、金子先生には、顔面の紅斑を呈する疾患の鑑別を頻度と経過、顔面へのタクロリムス外用薬の導入のポイント、顔面の皮疹と眼合併症について、それぞれ多くの症例を提示しながら考察していただきました。

その後の一般演題では、アトピー性皮膚炎の痒み評価の尺度として前回受診日からの終日痒みがなかった日(「痒みゼロの日」)を患者に問診することの意義について平野皮膚科医院の平野真也先生に、重症成人アトピー性皮膚炎患者のストレス対処と抗炎症外用薬によるタイト・コントロールに

よる変化について大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター皮膚科の片岡葉子先生に、漢方皮膚科外来を初診したアトピー性皮膚炎患者への質問票調査について東京女子医科大学東洋医学研究所の麻生悠子先生に、大学附属病院皮膚科を初診したアトピー性皮膚炎患者のその後の受診行動について島根大学皮膚科の杉原靖子先生に、それぞれご発表いただきました。

さいごに

いずれのセッションにおいても、活発な討論が展開され(図3)、会場の外でも熱心に意見交換がなされていました。当日の国立京都国際会館は、この研究会のほかにはイベントがなく、われわれのルームD(メインホールの左横)だけが熱気にあふれていました。本研究会での講演や討論、意見交換などが、ご参加いただいた方々の明日からのアトピー性皮膚炎の診療に少しでもお役に立つならば幸いです。最後になりましたが、大勢の参加者の方々と会の運営をサポートしていただいたすべての方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。